

トルコギキョウ斑点病の発病と温湿度との関係



写真1 発病葉

表1 各温度での発病と胞子形成の有無

管理温度 (°C)	初発確認	接種28日後		調査期間中の測定値(平均)	
		発病葉率(%)	胞子形成	温度(°C)	湿度(%)
15	未発病	0.0	—	15.2	91.0
25	接種14日後	90.0	あり	25.1	83.7
30	接種15日後	80.0	なし	30.0	85.9
35	未発病	0.0	—	34.8	81.4

注)調査期間は接種28日後までとした

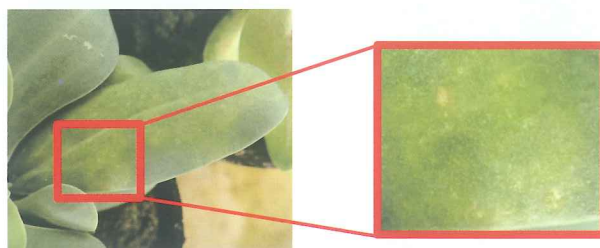
写真2 25°C管理の病斑
灰褐色病斑上に多数の胞子が形成されている写真3 30°C管理の病斑
病斑は退緑黄斑となり、胞子の形成は見られない

表2 高湿度または低湿度管理での発病

湿度管理	初発確認	接種26日後	調査期間中の測定値(平均)	
		発病葉率(%)	温度(°C)	湿度(%)
高湿度	接種14日後	100.0	23.9	93.7
低湿度	未発病	0.0	24.7	74.9

注)調査期間は接種26日後までとした

トルコギキョウ斑点病は、葉に灰～黒褐色のすす状の病斑を生じる病害(写真1)で、高知県では2016年に発生が確認されました。発病すると商品価値が低下し、ひどい場合には出荷不能となることから、大きな問題となっています。発病には一定の温湿度が必要と考えられることから、発病と温湿度との関係について調査しました。

トルコギキョウのポット苗に病原菌を接種後、保湿して人工気象器に入れ、15～35°Cで管理しました。その結果、25°C及び30°Cでは接種約2週間後から発病し、接種28日後には多くの葉で病斑が見られました(表1)。なお、25°Cでは病斑上に多くの胞子が形成されたのに対し、30°Cでは病斑上に胞子は見られず(写真2、3)、25°Cの方がより発病とその後の伝染に適していると考えられました。一方、15°C

及び35°Cでは、接種28日後までに発病は見られませんでした(表1)、15°Cで管理した株を25°Cに移したところ、移行2日後には発病が確認され、15°Cでは潜在的に感染していると考えられました(データ省略)。35°Cで管理した株は、25°Cに移しても発病せず、35°Cでは感染しないと考えられました。

同様に湿度について調査したところ、高湿度(平均93.7%)では接種14日後から発病が見られましたが、低湿度(同74.9%)では発病は見られませんでした(表2)。

これらのことから、本病は25°C付近の高湿度条件が発病に好適であることがわかりました。

今後も、発病に及ぼす条件を明らかにし、効果的な防除体系の確立に取り組めます。

(病理担当 岡美佐子 088-863-4915)